

茶畑のつらなり

日本三大銘茶といえば、何茶と答えるのが正解だろうか。私なら即座に「宇治、静岡、鹿児島」と答える。一方で、夫は「宇治、静岡、狭山」と答えるのだった。これは人によって異なるようで、そのなかでも宇治と静岡の茶のイメージは強く、どうやら一つ目、二つ目はあまり揺らがないらしい。問題は三つ目である。生産量で言えば鹿児島だが、その土地の茶への愛着を考えれば、首都圏居住者にとって三つ目は狭山なのかもしれない。私は実家が鹿児島にあり、多分の最良を含みながら鹿児島と答えるのである。ともすれば、嬉野の人に聞えば三つ目は嬉野茶になるだろうか。そんなことを考えながら、今年のゴールデンウィークに想いを馳せていた。

五月五日は父の命日である。その日、父母は明け方から車で陶器市へ向かっていた。目的地に到着した昼過ぎ、父が倒れたのはカフェの待合席に腰掛けたときのことだった。多くの人で賑わうなか、現場のカフェスタッフに即座に救急車を呼んでいただき、プライバシーに配慮をしながら対処してくださったと聞く。その場に駆けつけてくださった医療関係者、搬送先まで絶えず心臓マッサージをしてくださった救命士、イベント開催者、現場の警察関係者、父母の車を停めていた駐車場の管理者、イベントの賑わいのなか現地の方々には多大なご迷惑をお掛けした。搬送先は嬉野の病院だった。そこで父の死亡が確認された。病院では看護師の方に励ましていただき、死に際しても最大限の気遣いをいただいたと、あとになって聞いた。

母も動転していただろう。こちらでも連絡を受け、まずなにをすればよいか、どこへ向かえばよいか、どこで合流すればよいか、あらゆる判断が咄嗟には出てこなかった。よくわからないまま鞆に何泊分かの着替えを、なるべく黒めの衣類を詰め込んだ。困惑しながらも、羽田から鹿児島への航空券を取ることにした。オフシーズンであれば搭乗便を探すことは容易いが、大型連休中だった。旅行や帰省に賑わう空気の中、電車で空港へ向かう。向かいながら航空券を手配し、道すがら都内にいる妹たちと合流した。併行して、遺体の搬送について病院の方とやりとりをさせていただいた。九州の訛りが感じられ、少しの懐かしさも漂う。ときどきと電話でご対応いただく。実家近くの斎場とも連絡を取る。現実が現実味を帯びないままに、慌ただしく事が運んだ。ゴールデンウィークの終盤がこんな

ことになるとは思っても寄らず、脳内は小さなパニックを起こしながら、しかし口だけは自分でも不思議なほど冷静に動いていた。

病院から実家近くの斎場まで三〇〇km超、深夜の遺体搬送となった。私と妹たちは二十三時過ぎに鹿児島島の斎場に到着し、遺体を待った。寝ずに待つ深夜、近くにある二十四時間営業のスーパーへ飲み物や食べ物を買に行った。夜中のスーパーは閑散としていた。県道は街灯も少なく、五月の夜はまだ寒かった。うまく言葉にならない興奮が夜風のなかにあつた。

遺体の到着を待つ時間はとても長く感じられた。「遅いね、遅いね」と待ち遠しく唱えるかのように声かけあつた。実際に遺体が到着したのは午前四時頃。まだ生気の感じられる父の顔はただ眠っているように見えたが、頬や額に触れると冷たく、皮膚は少し硬くなっていた。倒れた現場から病院、斎場への搬送までの母の心中は察しきれない。父が到着してから、部屋には強めの冷房が入られた。父のいる部屋はとても寒く、私たち姉妹は隣の畳部屋で仮眠をとることにした。母だけが朝まで父のそばに居続けた。

あれから少し時間が経った。父が亡くなった日、父母は佐賀県内で宿泊を予定していた。その際の宿は連絡もせぬままキャンセルとなっていた。

そんな命日を思い出しながら、此度のゴールデンウィークの旅である。有田、伊万里、嬉野を訪れようと決めていた。この土地の、この季節の、新緑や水を想うまま吸いたいと思うのだった。

骨壺のぬくみ溶けゆく蒼天にただつらなりぬ茶畑ちやばたのつらなり

令和七年五月六日 和多屋別荘にて